

平成 21 年 4 月 30 日現在

研究種目： 基盤研究 (C)
研究期間： 2006～2009
課題番号： 18500577
研究課題名 (和文) 東京女子高等師範学校における家政学教育の展開と専門職意識の形成

研究課題名 (英文) Development of Home Economics Education and Professional Development in Tokyo Women's Higher Normal School

研究代表者

八幡 彩子 (谷口 彩子) (YAHATA-TANIGUCHI AYAKO)

熊本大学・教育学部・准教授

研究者番号：90259763

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般

キーワード：東京女子高等師範学校、専門職意識、家政学教育、鹿内瑞子、鹿内瑞子旧蔵資料、家政学成立史

1. 研究計画の概要

(1) 研究の目的

近年、国際家政学会や日本家政学会において、社会貢献や専門職の育成をめざした家政学教育のあり方が問われている。従来、日本の家政学史研究においては、「学術」としての家政学のあり方に注目した研究が主流であった。しかし、「社会貢献」や「専門職」としての家政学のあり方とその展開過程を考える時、明治期以降の日本の家政(学)教育について、再検討する必要があると考える。

そこで、本研究では、戦前において(女子)中等教員養成機関として家政学に関する教育・研究を担った東京女子高等師範学校を取り上げ、同校における家政学教育の展開と専門職意識の形成の状況について検討することを目的とした。

(2) 研究の内容

明治期における東京女子師範学校としての設立期から戦後の(新制)お茶の水女子大学家政学部の発足以降までの時期を対象に、

家政学に関するカリキュラム等の教育内容の調査、同校で家政(学)教育を担当した教師に関する教育内容や著作等の調査

同校(家事科・家政科)に学んだ卒業生の社会的活動や諸著作等に関する調査、などを通して、上記の研究目的について検討した。

2. 研究の進捗状況

(1) 明治期、大正期、戦中・戦後期における東京女子(高等)師範学校における家政学教育の状況について資料収集と検討を行った。その結果、明治期には未だ「技芸科」という

学科名称による教育が行われており、必ずしも「家政(家事)」に専門特化した教育が行われていたわけではない。しかし、当時は、女性が中等レベル以上の教育を受ける機会は限られており、学んだことを卒業後の教職活動に活かそうという意識は高かったとみられる。とくに卒業後、同校卒業生は、女性特有の教育機会である家政(家事)教育に携わった者も多かった。そうした状況下で、家政に関する教職への「専門意識」は、創設当初から高かったことが伺われた。同校における家政(学)教育の「科学化」が進んだのは大正期以降であり、これ以降、家政学の「学術」としての発展をめざす動きが加速していったと考える。

(2) 東京女子高等師範学校家事科・家政科卒業生の社会的活動や諸著作等の調査および聞き取り調査などを実施した。同校の家政学教育に携わった教員の諸著作については、これまでもある程度知られてきたが、本研究により、同校の卒業生についても、戦後の「家政学」教育・研究の礎を築いた人々が多く含まれており、多数の研究論文や著作が確認できた。とりわけ、同校家事科の卒業生で、戦後小学校家庭科の教育課程行政に携わった鹿内瑞子氏の旧蔵資料が公開された意義は大きい。戦後、新しい教科として発足した家庭科の目標・内容の構築にあたって、明確な家政学理念を持って指導にあたった鹿内氏の足跡は注目できる。

(3) 東京女子高等師範学校家政科(家事科を含む)と戦後発足したお茶の水女子大学家政学部初期の卒業生の諸言説を比較すると、家

政学理念を明確に意識した前者と、「科学的研究方法」を意識した後者という違いがあるように思われるが、この点については、引き続き検討を行いたい。

3. 現在までの達成度 やや遅れている。

(理由)

研究期間中に、東京女子高等師範学校卒業生で、戦後の小学校家庭科に関する教育課程行政の要職にあった鹿内瑞子氏の旧蔵資料が国立教育政策研究所教育図書館で公開された。これは研究開始当初予想していなかったタイムリーな資料公開で、この膨大な資料調査に思いの外時間をとった。この資料調査は途中であるが、現在までの資料検討により貴重な発見が数多く見出されている。

また、本研究と並行して、科学技術振興調整費(女性研究者モデル育成)の事業(2006~2008年度採択)に関わることになったため、研究計画を立案した当初想定したエフォートが、本研究のために確保できなかったことも研究が「やや遅れた」理由である。

4. 今後の研究の推進方策

(1) 本研究の遂行のためにエフォートを充分確保することが、本研究を今後推進するための最大の課題である。本研究は個人による単独研究であるため、研究代表者が本研究のためにどれだけの研究時間を確保できるかが研究推進のためには不可欠である。(実際には大学内外の諸活動のため、研究時間の確保には困難が予想される。)

(2) 当初実施予定であった卒業生へのアンケート調査は、個人情報の保護等の観点から、同窓会の協力が得られにくい状況にある。それを補足するために、昨年お茶の水女子大学が実施している卒業生への諸調査を、調査結果の公開を待って、本研究の補足資料として検討することとする。

(3) 研究成果において、鹿内瑞子旧蔵資料による分析内容の比重を高めつつも、当初の研究計画が達成できるよう、本年度の研究に取り組みたい。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計 2 件)

八幡(谷口)彩子、昭和 20 年代の小学校家庭科と鹿内瑞子 - 東京女子高等師範学校卒業生と家政学専門職に関する研究の一環として -、(社)日本家政学会第 60 回大会、2008 年 6 月 1 日、日本女子大学

八幡(谷口)彩子、鹿内瑞子旧蔵資料から

みた昭和 20 年代小学校家庭科 - 東京女子高等師範学校卒業生と家政学専門職に関する研究の一環として -、(社)日本家政学会第 59 回大会、2007 年 5 月 12 日、長良川国際会議場